

成果報告書

2018年度助成	所属機関	二本松市立小浜小学校	
役職 代表者名	校長 藤原 謙	役職 報告者名	教諭 青木 隼
テーマ	主体的に学ぶ児童の育成をめざして ～教材との出会いと話し合いの工夫を通して～		

※ご異動等で現職の方では成果発表が難しい場合、上記代表者または報告者による代理発表を可といたします

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

本校は、教育目標に「自ら学びたくましく生き抜く子ども ～元気な子ども 思いやりのある子ども 進んで学ぶ子ども～」を掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。学習においては、自ら学習に取り組み、基礎的・基本的な学習内容を確実に身に付けた児童の育成を図っている。

本校の児童の課題は、「学習への意欲や主体的な取り組み」、「基礎基本の定着」、「集団としての高まり」である。その中でも、学習への意欲や主体的な取り組みについては、学習計画を立てたり、話し合い活動を行ったりする場面などで特にその様子が感じられる。楽しい授業・分かる授業を実践し、子どもの学ぶ意欲を高め、学力の定着を図っていくためにも「主体的に学ぶ児童」を育成することは、本校の重要な課題であり、本校の目指す子どもの姿である。

今回の学習指導要領の改訂に伴い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められている。単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面、グループなどで対話する場面、児童が考える場面と教師が教える場面をどこに設定し、どのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものとしている。理科においては、資質・能力を育むために、自然に親しみ、見直しをもって観察・実験などを行い、その結果を基に考察し、結論を導き出すなどの問題解決の活動や、日常生活や社会との関連も重視されている。

具体的な観察や実験など体験しながら学ぶ「理科」は、児童の興味・関心を高めながら児童の主体性を引き出すのに最適な教科であると考えられる。また興味・関心だけに終わることなく、主体的な姿が学習の最後まで続いていくために、授業の過程において、見直しをもったり、話し合いを行ったりするなど探究的な学習を進めて行くことが有効であると考えられる。

これらを受け、本校では「主体的に学ぶ児童の育成」をテーマに掲げ、授業研究を行っていくこととした。

2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

実践にあたり、児童が学習を見直し振り返る場面、グループなどで対話する場面、児童が考える場面と教師が教える場面等で必要となる機器や材料の洗い出しを行い、主に授業で活用する実験器具、ICT機器、周辺機器と、その他の学習環境を整備するための消耗品を購入することとした。

- 主に授業で活用する機器
 - ・ iPad (含ケース・フィルム)
 - ・ Apple lightning-digital AV アダプター
 - ・ iPad スタンド 等
- 理科室の整理・整頓、学習環境を整備するための消耗品
 - ・ ポリスポイト 等

3. 実践の内容

1 目指す児童像

「主体的に学ぶ児童」の育成には、単元や授業での以下の3つの場面の指導がより効果的であると考え、それぞれの場面において目指す子ども像を設定した。

場面	目指す子ども像
I 問いや思いを引き出す教材との出会い	「なぜ?」「どうしてだろう?」「知りたい」などの気持ち、意欲をもって課題に向かう子ども
II 目的意識を高める計画や見通し	課題を明確にとらえ、既習の内容や生活経験などから自分なりの予想を立てたり、解決方法を考えたりする子ども
III 思考を深める話し合い	自分の考えをもち、その考えを話そうとするとともに、友達の考えを聞こうとしたり、理解しようとしたりする子ども

2 手立て

理科における手立てを次のように設定した。単元の計画や本時の学習内容、ねらい等に応じて効果的だと思われる手立てを講じることとする。

(1) 教材との出会いの工夫

- ・ 何のために実験・観察をするのか、必要感のある課題提示
- ・ 日常生活との関連を図った事象の提示や視聴覚機器の活用

(2) 目的意識を高める計画や見通し

- ・ 既習の内容や身の回りの生活との関連を想起させる場の設定
- ・ 自分なりの予想や解決方法を明記するノートの指導

(3) 思考が深まる話し合いの場を充実

- ・ 「理科の見方・考え方」に基づく話し合いの場の設定
- ・ 児童の考えをつなげるコーディネート

3 実践

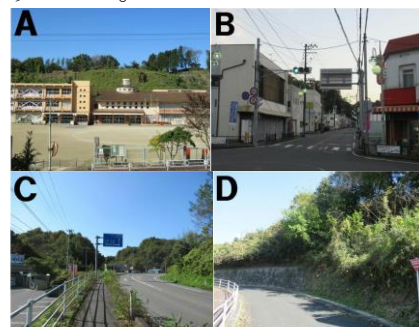
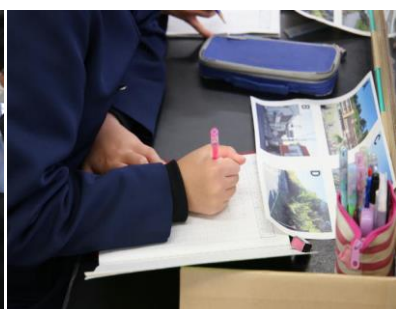
実践1	第3学年「太陽とかげを調べよう」	(令和2年9月24日)	【教科ブロック授業】
実践2	第5学年「流れる水のはたらき」	(令和2年10月19日)	【教科ブロック授業】
実践3	第4学年「物のあたたまり方」	(令和2年10月28日)	【教科ブロック授業】
実践4	第6学年「変わり続ける大地」	(令和2年11月5日)	【全体授業】

第6学年（全体授業）の「変わり続ける大地」では、自分の地域に起こりうる地震や火山の噴火による災害や備えについて考える授業を次のような手立てを講じて行った。

小浜地区の写真を提示することで、地震や火山の噴火による災害を自分事としてとらえ、関心をもって取り組むことができるようにした。また、スクリーンに大きく提示したり、構造的に板書したりすることで、児童の思考の流れを視覚化し、話し合いが充実するようにした。



【写真を見て考えたり、気付いたことをメモしたりしている児童】



【小浜地区の写真】

4. 実践の成果と成果の測定方法

1 手立てに対する成果

- (1) 『なぜ?』『どうしてだろう?』『知りたい』などの気持ち、意欲をもって課題に向かう子どもについて

デジタル教科書等をスクリーンに映すなど、ICTを活用し可視化することは児童の関心を高めることに効果的だった。また、地域など身近な素材や出来事を学習課題に設定することで、より自分のこととしてとらえることができた。

〈第6学年「変わり続ける大地」より〉

自分たちの住む場所の写真を提示することで、より地震によって起こる災害について、関心をもって考えることができた。ほとんどの児童が知っている場所を4枚取り上げたことで、考えが共有しやすかった。みんなが知っている場所だからこそ、真剣に考えなくてはいけないという思いをもたせることができた。



- (2) 「課題を明確にとらえ、既習の内容や生活経験などから自分なりの予想を立てたり、解決方法を考えたりする子どもについて

予想を発想する際に、児童の生活の中にある場面や景色、物についての資料を基に生活経験を想起して考える姿が多く見られた。

〈第3学年「太陽とかげを調べよう」より〉

運動会や校庭で遊ぶ様子の写真を提示することで、自分の生活経験から予想を立てる姿が見られた。



- (3) 「自分なりの考えをもち、その考えを話そうとするとともに、友達の考えを聞こうとしたり、理解しようとしたりする子どもについて

教師が意図的に問い返したり、違う児童に再生させたりすることで、児童はよく聞き、理解しようとしていた。スクリーンや写真や動画を見せたり、タブレット端末を使ってグループで活動させたりすることで、話し合いへの意欲を高めていた。

〈第5学年「流れる水のはたらき」より〉

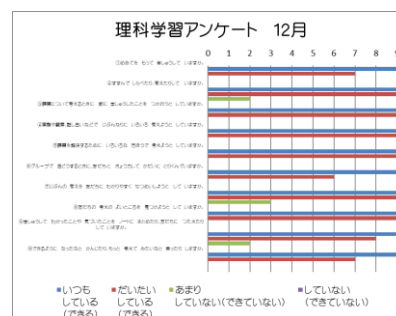
タブレット端末を使って、実験の様子を撮影した。その動画を確認しながら、実験の考察を話し合わせることで、根拠をもって話し合わせることもできた。



2 子どもたちの意識の変容

3～6学年の全児童に、7月と12月に学習アンケート調査を実施した。複数の項目で、意識の向上が見られた。

- (1) 「課題を解決するためにいろいろな方法で考えようとしていますか」では、3学年、4学年、5学年、6学年で「いつもしている」と答えた児童が増えた。
- (2) 「グループで活動するとき、友達と協力して課題に取り組んでいますか」では、3学年、4学年、6学年で「いつもしている」と答えた児童が増えた。
- (3) 「学習して分かったことや考えたことを自分の言葉でまとめていますか。」でも、3学年、5学年、6学年で7月に比べて「いつもしている」と答えた児童が増えた。
- (4) 「できるようになったなと感じたり、もっと考えてみたいなと思ったりしますか」では、3学年、4学年、5学年で「いつもしている」と答えた児童が増えた。



5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）

1 教材との出会いの工夫

写真や資料を提示する際、児童が、本時のねらいと関係のない事柄にこだわって話合いが進んでしまい、論点がずれてしまう場面も見られたことから、児童に注目させたいことは何か、そのためには何を提示すべきなのかを精選することが重要であることを改めて感じた。

2 目的意識を高める計画や見通し

単元全体が見通せる学習カードや既習を振り返ることができる掲示物等の活用が効果的だった。児童が、何のために実験・観察をするのかを自分で見つめることができるようにしたい。

3 思考が深まる話し合いの場の充実

タブレット端末を活用することで、児童の意欲を高めたり、理解を深めたりすることに効果的だった。また、一人一台端末も導入されたが、先行して使い方に慣れていたため、教師も児童も円滑に使うことができた。さらに、コロナ禍において、児童の活動が制限されている状況にあっても、授業を構想する際に、本時のねらいや授業者の意図を十分考慮した上で効果が期待される活動については、感染症対策を入念に行い、児童がのびのびと活動できるようにしてきた。

4 学習アンケート調査から

「実験や観察、話し合いなどで自分なりにいろいろ考えようとしていますか」という質問項目では、3学年、4学年で「いつもしている」と答えた児童が減少した。本時における課題を自分事としてとらえさせ、理科的な見方・考え方を働かせながら学習活動に取り組むことができるようにしたい。

6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ メディアなどに掲載、放送された場合は、ご記載ください

- 二本松市学力向上論文 優秀賞
- 安達地区小学校教育研究会 研究論文へ出品

7. 所感

「主体的に学ぶ児童の育成」をめざして、目指す児童の姿を設定し、教科の特性を踏まえた具体的な手立てを講じて授業実践を行った。また、教科の本質や特性を踏まえるために、その授業で働かせたい見方・考え方についても検討し、意識して授業を構築してきた結果、いくつかの成果と今後の展開が見えてきた。

授業研究を通して、児童が意欲的に課題に取り組み、友達に関わろうとする姿や、授業の終末に自分の学びを進んで振り返ろうとする姿が多く見られたことは大きな成果であり、「教材との出会いの工夫」「目的意識を高める計画や見通し」「思考が深まる話し合いの場を充実」は、児童の主体的な学びを育むために有効だったと言える。

また、より主体的に学ぶ児童を育てていくためには、表現する力が必要であることに気付いたことも今年度の研究の成果である。課題を解決するときや自分の学びを確かめるときに、話したり、書いたりして表現することに抵抗を感じている児童が多いことから、そのことは明らかである。「やってみよう」「分かった」と思ったときに、そのことについてどのように表現し、伝えるかという力が非常に重要になる。より一層自ら課題や友達に関わってくためには、相手に分かりやすく話したり、書いたりする表現力を高めていくことが大切になる。

最後に、今般のコロナ禍において、主体的に学ぶ姿勢は不可欠なものである。新しい生活様式の中で、様々なことに自ら気を付けながら生活していく態度や、自ら学び続けていく姿勢を育てていきたい。そして何より、主体的に学ぶ児童を育成したいという私たちの願いの実現に向けて、これからも全職員が一丸となって、研修と修養に努めていきたい。